

『古事記』神話と『日本書紀』神話の比較研究

——特に別天つ神、神世七代、および、国生みをめぐって——

岸*
根
敏
幸

はじめに

『古事記』「上つ巻」に記される神話と『日本書紀』「神代」に記された神話は、日本神話研究の歴史において、あるいは、それらを神典として仰いできた神道の実際の場においても、「記紀神話」という表現でまとめられ、相補い合うものとして位置づけられてきた。

たしかに両神話は、天と地の分離に始まって、初代天皇となるカムヤマトイハレビコの登場で終わっており、最初から最後まで、物語の展開という点では共通しているところが多くある。全く異質な神話に比べるならば、両神話は

ほとんど同じ神話であると考えられなくてもよいであろう。

しかしながら、両神話を比較すると、実に多くの違いを見出すことができる。それらには、些細な違いもあるが、捉え方によっては、根本的な世界観の違いにまで及ぶものもある。端的に言うならば、『古事記』神話と『日本書紀』神話の関係は、「異なるが、似ているもの」ではなくて、「似ているが、異なるもの」と見なされるのである。

近年に至るまで、作品論的研究という方向性が日本神話研究における主流を占めており、その流れに基づいて、とりわけ『古事記』神話については、多くの研究が蓄積されてきた。それらの研究成果により、今日では、『古事記』神話と『日本書紀』神話を「記紀神話」という表現でまとめて論じることが、少なくとも学問的には、ほとんど不可能になったと言つてよいであろう。

このような研究の流れを受け継いで、今後の研究課題としては、『古事記』神話と『日本書紀』神話のそれぞれの特色を明らかにするためにも、両神話を比較して、その違いを徹底的に考察する必要があるだろう。それはひいては、おそらく年代的にある程度近い時代に、まったく別個の神話体系が編纂されるに至った思想的、社会的背景を解明することにも繋がると思われる。

ところで、『日本書紀』の場合、編纂者は特に神話を記述する際に限って、それを正式な記述と「一書に曰く」という表現で始まる付随的な記述の二つに分けている。本稿ではその各々を「本文神話」「別伝神話」と呼ぶことにしたいが、それらのうちで編纂者が正式に認めるのは本文神話の記述のみであり、別伝神話の記述は、結局のところ、

傍系の資料として扱われているにすぎない。したがって、『日本書紀』の神話に含まれているからといって、それがすべて編纂者によって正式に認めているとは限らないのである。

たとえば「黄泉つ国」という世界は『日本書紀』の神話に多く登場するのであるが、本文神話には黄泉つ国に関する記述がまったく出てこない。つまり、これは、『日本書紀』編纂者が黄泉つ国という世界を、何らかの理由によって、自らが認める神話から除外したことを意味しているのである。

このように、『日本書紀』の神話には、実際に記述があるのに編纂者がそれを正式に認めているとは限らないような記述がある。というよりも、そのような記述の方が分量的には圧倒的に多いのである。¹⁾

『古事記』神話と『日本書紀』神話を「記紀神話」と呼んで、互いに異質なものである可能性が高いのに、同じものとして扱うことがあった点については前述した通りであるが、『日本書紀』神話そのものについても、本文神話と別伝神話の内容を明確に区別せず、必要に応じて相補わせるように扱ってきた場合が多い。しかし、そのような扱い方は、『日本書紀』編纂者の意図を見誤らせることにつながる危険性があるだろう。

そのような理由から、『古事記』神話と『日本書紀』神話を比較するに当たっては、『日本書紀』神話をあくまでも本文神話に限定しなければならない。そうでなければ、厳密な意味での比較にならないからである。ただし、様々な伝承を含む別伝神話には、本文神話とは異なっており、『古事記』神話に類似するような記述も見出されるので、考察のための参考として、適宜言及することにした。

以上のように、『古事記』神話と『日本書紀』神話——特に本文神話——を比較するという考察を進めたいと思うが、それはおそらく膨大な分量に及ぶものと予想されるので、今後、幾つかに分けて発表してゆく予定でいる。本稿はその第一弾として、『古事記』神話の最初に登場する別天つ神、それに続いて登場する神世七代という神、そして、イザナキとイザナミによる国生みという三つの記述を扱うことにしたい。

一 別天つ神をめぐる

(あ) 天と地の分離、および、高天の原の登場

世界の起源に関しては、『古事記』神話と『日本書紀』本文神話のいずれも、上方が天（あめ）、下方が地（つち）という形で分離したと説明する。分離する以前の状況については、『古事記』神話が何も述べていないのに対して、『日本書紀』本文神話は、いずれも形状が定まらなっていないことを意味する「混」「沌」という概念によって説明している。ただし、『古事記』の冒頭にある序では「混元既に凝りて、氣象未だ効れず。名も無く、為（わざ）も無し」と記⁽³⁾していて、天と地が分離する以前は、形状の定まらないカオスの状態であったと述べている。したがって、この序を文字通り『古事記』の序と見なすならば、両神話ともに、天地の分離以前をカオスの状態として捉えている点で一致していることになるが、この序を『古事記』の序と見なさないならば、両神話の捉え方に違いがあるという

ことになるであろう。筆者は、序としての形式、そこで語られている神話の内容、漢字表現の仕方という点からいって、この序を『古事記』に元々付随していた序と見なすことは保留すべきであると考えている。⁴したがって、『古事記』神話の場合、『日本書紀』本文神話と異なり、天と地の分離以前について特に言及していないと捉えておくことにしたい。

ところで、『古事記』神話では天と地の分離に際して、「高天の原」という術語を導入している。この高天の原は、天と同様に天上界を指す術語であるが、「天」が「地」と対比されて、いわば、神話における自然的な世界を構成するものの一つとして位置づけられているのに対して、「高天の原」に対比されるのは、地上世界にある「葦原の中国」という国などであって、高天の原は自然的な世界というよりは、神話における社会的な世界を構成するものの一つとして位置づけられている。⁵

しかしながら、この「高天の原」という世界が『日本書紀』本文神話において認められているのかどうかは意見の分かれるところである。『日本書紀』本文神話には「高天の原」という術語が一回登場しているとされる。たとえ一回であっても、もし登場しているのであれば、『日本書紀』編纂者が高天の原という世界を認めていることになるけれども、本文神話における「高天の原」という語の登場については、テキスト上の問題があつて、写本によって「高天」と「高天」の二つのヴァリエーションが存在しているのである。⁶

この点に関して、一方の「高天原」となっている写本については、書写する元の写本で「高天原」であったか、あ

るいは、元々は「原」という語がない「高天」であったものを、それを書写した者が「高天」というのは「高天原」の誤りであると考えて、「原」という語を補ったかのいずれかの可能性が考えられるだろう。他方の「高天」となっている写本については、書写する元の写本で「高天」であったか、あるいは、元々は「高天原」であったのに、「原」という語を書写しなかったかのいずれかの可能性が考えられるであろう。

これらの可能性のうちで、ただ一つのを排他的に選択するだけの明確な根拠を見出すことはできないであろう。それゆえ、『日本書紀』本文神話で「高天の原」という術語が用いられていたのかどうかについて、確定的な判断を下すことは保留せざるをせない。

しかし、もし『日本書紀』本文神話が「高天の原」という術語を導入していたとすれば、もう少し適切な記述の仕方があったはずであろう。『古事記』神話のように、神話の冒頭で華々しく登場させるわけでもなく、神話の途中でほんの一度だけ断片的に言及しているにすぎないからである。その点からして、仮に「高天の原」という術語が使用されていたとしても、『古事記』神話とは大きく異なっており、『日本書紀』本文神話の場合、「高天の原」という世界を積極的に説き記そうとする意志を感じ取ることは難しい、と指摘することはできるであろう。

(い) 別天つ神の登場

『古事記』神話では、天と地が分離した直後に「別天つ神」という術語で表される五柱の神が登場する。それはア

マノミナカヌシ、タカミムスビ、カムムスビ、ウマシアシカビヒコヂ、アマノトコタチという神である。これに對して、『日本書紀』本文神話では、「別天つ神」という術語は見出されず、また、天と地の分離した直後に、この五柱のいずれの神も登場することはない。ただし、タカミムスビのみは、第九段というかなり後の段落で皇祖という形で唐突に登場している。

『古事記』神話の説明によると、別天つ神は「隱身」^⑦、すなわち、姿を現さない形で存在している。それは「独り神」^⑧、すなわち、男女に性別が分化する以前の単独の神であると述べられていることから伺えるように、表象するような形を本来もっていないのである。したがって、これらの神は、神話において具体的に何らかの活動をする存在者として現れているのではなく、基本的には、そういう存在者の背後にあつて、それを支えている力のようなものと考えた方が妥当であろう。そのような点から、これらの神は、つぎのようなことを表していると考えることができるのである。

アマノミナカヌシ…天に中心をもたらし、秩序ある世界に仕立てているということ。

タカミムスビとカムムスビ…その世界に何かを生成する力を与えているということ。

ウマシアシカビヒコヂ…その生成の力に、葦の芽のような勢いを与えているということ。

アマノトコタチ…天を維持する土台を与えているということ。

これらのことから、別天つ神は天上界の發展してゆく過程を具体的に描写していると考えられるのであり、『古事

記』神話ではそれを、「次いで」という接続の語を間に挿入して、神名を順番に並べてゆくという形で行っているのである。

それに対して、『日本書紀』本文神話ではこの別天つ神に対する言及がまったくない。『日本書紀』別伝神話に属する各伝承には、それらを合わせれば、この五柱の神がすべて登場しているので、『日本書紀』編纂者は五柱の神について知ってはいたが、本文神話において、あえてそれらに言及しなかったと指摘することができであろう。そのような取り扱いは、「高天の原」という術語を使用しなかったか、使用したとしても、それを積極的に説き記そうとはしていなかったという前述の指摘とも呼応しているように思われる。端的に言うならば、『日本書紀』編纂者は、天という世界そのものにそれほど強い関心を寄せてはいないのである。

二 神世七代をめぐる

(あ) 神世七代の登場

別天つ神に続いて登場するのが神世七代の神である。神世七代については、『古事記』神話と『日本書紀』本文神話で言及があるが、両神話には違いが見出される。まず大きな違いとして、神世七代の各代の神名が完全には一致しないこと、そして、それに伴って、全体の神の数も一致していないことが挙げられる。『古事記』神話と『日本書紀』

本文神話で記されている神世七代の神を挙げると、次のようになる（○で囲んだ数字は神世七代のうちの代数を示す。また、中黒で結びつけられている二神は、男女で一对の対偶神を示す）。

『古事記』神話

①クニノトコタチ ②トヨクモヌ ③ウヒヂニ・スヒヂニ ④ツノグヒ・イクグヒ

⑤オホトノヂ・オホトノベ ⑥オモダル・アヤカシコネ ⑦イザナキ・イザナミ

『日本書紀』本文神話

①クニノトコタチ ②クニノサツチ ③トヨクムヌ ④ウヒヂニ・スヒヂニ

⑤オホトノヂ・オホトノベ ⑥オモダル・カシコネ ⑦イザナキ・イザナミ

この一覧からも分かるように、『古事記』神話では四代目にツノグヒとイクグヒという男女一对の神が登場しているのに対して、『日本書紀』本文神話ではそれらの神が登場しておらず、それに代わって、二代目にクニノサツチという神が登場している。その結果、二代目から四代目までの神が一致しなくなっており、それに伴って、登場する神の総数も『古事記』神話で十二柱であるのに対して、『日本書紀』本文神話では十一柱ということになっている。

それ以外の違いとして、男女一对の神が登場する以前の神に対する位置づけが一致していないことも挙げられるであろう。すなわち、『古事記』神話では、クニノトコタチとトヨクモヌという二神について、別天神と神と同様に、性別がまだ分化していない「独り神」であると捉えるのに対して、『日本書紀』本文神話では、クニノトコタチ、クニ

ノサヅチ、トヨクムヌという三神について「乾道（あまのみち）^⑨ 独り化（な）す。所以に、此の純男（をとこのかぎり）を成せり」と述べていて、^⑩ 女性的性質がまだ存在しない状況で、純粹に男性的性質によって成り立っている神として捉えているのである。

以上のように、神世七代に登場する神そのものについての違いが見出されるのであるが、それに先行する別天つ神の部分まで通して見ると、『古事記』神話と『日本書紀』本文神話において、最初に登場する神が一致していないという重要な違いも指摘できるであろう。これは単なる順番の問題に留まるのではなく、この世界の成り立ちについて語って行くための視点の置き方自体が異なっていると指摘することさえできるのである。すなわち、『古事記』神話で最初に登場するのは、天という上方の領域を秩序ある世界へと変えて行くことになるアマノミナカヌシであって、神話の始まりにおいて天上界の発展過程について語るのであるが、『日本書紀』本文神話で最初に登場するのは、地上界にある国をしっかりと支えるクニノコタチであって、天と地が分離した後、地上界にのみ視線が注がれているのである。

（い） 神世七代の意味するもの

神世七代とそこに登場する個々の神がどのような意味をもっているのかについては、先行研究でも意見が分かれており、一致をみていない。しかしながら、それらの神が神話においてしかるべき文脈のもとに現れているのであると

いう基本線は認識しておかなければならないであろう。したがって、大地すらまだ存在していないのに、村落や家屋への侵入を防ぐ防塞守護神が現れたなどというような理解は、⁽¹¹⁾そのような文脈に照らすならば、容認することが難しいであろう。

筆者は、かつて論じたように、日本神話における神の登場は、神話という物語の中で活躍する存在者が現れるというだけでなく、その名が示している事態の描写を意図している場合があると捉えている。⁽¹²⁾それは、もっぱら神名を列挙することに終始している神話の最初部分にとりわけ顕著に見られる特色であると言える。このような捉え方に基づくならば、別天つ神において天に秩序と生成の力が備わったことが描写されているように、神世七代においても何らかの事態が描写されていると考えられるであろう。それは端的に言うならば、生成を具体的に実現するため、イザナキとイザナミという完成した一对の男女神が登場することを描写するというものである。⁽¹³⁾そして、七代という時間的経過はその登場に至るまでの過程を示していると考えられるのである。

このような考え方に沿う形で、『古事記』神話で示されている神世七代の神の登場を次のように位置づけることができるであろう。

- (一) クニノトコタチ：国を維持する土台を与えられているということ。
- (二) トヨクモヌ：豊かさをもたらす兆しのある沼が現れているということ。⁽¹⁴⁾
- (三) ウヒヂニ・スヒヂニ：一对の泥状のものが現れたということ。

(四) ツノグヒ・イクグヒ：それらが杭のように伸び、姿を備えたということ。

(五) オホトノヂ・オホトノベ：それらが強い生殖の力を備えた男女になったということ。

(六) オモダル・アヤカシコネ：それらが互いを意識したということ。

(七) イザナキ・イザナミ：相手に惹かれ合う一対の男女になったということ。

これに対して、『日本書紀』本文神話では、『古事記』神話における(一)と(二)の間にクニノサツチの神が登場している。このクニノサツチは、『古事記』神話では、神世七代よりも後の神生みのところで登場しており、この神の位置づけについては、両神話で著しい違いを見せている。この神の「サツチ」という言葉の理解をめぐっては諸説があり、一致していない。¹⁵⁾ここでは一応、土のことであると捉えて、国を維持する土台の成立↓土の出現↓豊かさをもたらす兆しのある沼の出現という展開を想定してみたい。

さらに、『日本書紀』本文神話では、『古事記』神話における(四)のツノグヒとイクグヒの登場がない。ある別伝神話(第三段の第一の一書)にツノグヒとイクグヒは登場しているので、『日本書紀』編纂者が神世七代にツノグヒとイクグヒをあえて入れなかったということが推測される。その理由として、クニノサツチを入れる必要があり、かつ、七代でまとめなければならないため、ツノグヒとイクグヒを除いたという可能性と、逆に、ツノグヒとイクグヒを外して、六代になったため、クニノサツチを入れて、七代としたという可能性が考えられるが、ツノグヒとイクグヒを外さなければならない積極的な理由というのは特に考えられないので、前者の可能性の方が高いように思われる。

したがって、『日本書紀』本文神話の場合、泥状のものが二つ現れた後、それが一挙に強い生殖の力を備えた男女になった、と描かれていることになるであろう。

以上のように、神世七代に関して『古事記』神話と『日本書紀』本文神話を比較し、考察を加えた。両神話で一致する点としては、別天つ神の場合と異なり、神世七代という発想自体は共に有している点、そして、それが、具体的な生成を行うイザナキとイザナミという一対の男女神の登場ということに帰結している点が挙げられるであろう。他方、両神話で相違する点としては、神世七代を構成する神の名や登場する総数が完全には一致していない点、さらに、男女に分かれる以前の神を『古事記』神話では、男女の性別をまだ持たない独り神と規定するのに対して、『日本書紀』本文神話では女性的性質を前提としない単独の男性的性質を有する純男と規定している点が挙げられるであろう。

三 国生みをめぐって

(あ) 国生みの始まり

神世七代の最後に登場したイザナキとイザナミは国生みに着手する。『古事記』神話では「国土（く）に」を生み成さむ」、「日本書紀」本文神話では「洲土（く）につち」を産生（う）まむ」と述べているので、両神話におけるこの過

程を「国生み」と呼んでもよいであろう。ただし、この国生みを始めるに至った経緯は両神話では大きく異なっている。そこで、国生みを始めるに至るまでの状況について、両神話の内容を整理しておこう。

『古事記』神話

- (一) イザナキとイザナミが天つ神から国の修理固成を命じられる。
- (二) 天つ神から賜った天のヌボコを用いて、オノゴロ嶋を作り、そこに降りる。
- (三) 結婚する。
- (四) 手順の誤りに気づいたが、国生みを始めて失敗し、ヒルコ、次いで、淡嶋が生まれる。
- (五) 天に昇り、天つ神からの助言を得る。
- (六) やり直して、国生みを行った。

『日本書紀』本文神話

- (一) イザナキとイザナミが相談して、国生みを始める。
- (二) 天のヌボコを用いて、オノゴロ嶋を作り、そこに降りる。
- (三) 結婚する。
- (四) 手順の誤りに気づいて、やり直し、国生みをしようとするが、淡路洲が出てきて、満足のゆく結果にならなかった。

『古事記』神話の場合、イザナキとイザナミによる国生みは天つ神から命じられ、国生みのための拠点と言えるオノゴロ嶋を作る際には、天つ神から授かった天のヌボコが用いられ、さらに、国生みが当初失敗に終わった際には、天に向いて天つ神の助言を受けている。このように、『古事記』神話において、イザナキとイザナミの国生みには天つ神の意向というものが決定的に反映されているのである。

なお、この場合の天つ神というのが具体的に誰を指しているのかは明示されていない。これまでに登場した別天つ神、神世七代の初めの二代は隠身と規定されており、前述したように、それらの神は表象しうる形を持たず、存在者の背後で働く力のようなものであった。また、神世七代で後続する四代の神は七代目であるイザナキやイザナミへと展開してゆく神であって、イザナキやイザナミと区別される別な神として考えることは難しい。したがって、命令を出す天つ神に該当するような神はいないようにも思われるが、別天つ神で、世界における生成の力を表しているタカムムスヒとカムムスヒという二神は、神話の後の方の話で、目に見える形で登場し、他の神に命令を下したり、助けたりするということがある。本来、隠身である二神がなぜ姿を表しうるのかということ自体、大きな問題であるが、表には現れず、裏から支えている神が、特別な状況の中で顕在化するということが、『古事記』神話において可能性として否定されてはいないことになるのである。⁽¹⁶⁾

そのような点を考慮するならば、タカムムスヒやカムムスヒがイザナキとイザナミに国生みを命じ、その実現に向けて働きかけた天つ神であると推測することが可能であろう。

これに対して、『日本書紀』本文神話の場合、イザナキとイザナミは自ら意志で国生みすることを決め、元々持っていたと思われる天のヌボコを用いてオノゴロ嶋を作り、結婚の手順に失敗しても、自分たちだけでやり直している。『日本書紀』本文神話において、イザナキとイザナミの国生みには天つ神の意向がまったく反映されていないのである。これは大きな違いであると言えるであろう。『日本書紀』本文神話の場合、天という世界そのものにそれほど強い関心を寄せてはいないということを前述したが、ここでも、地上の国の成り立ちに関して、天は特別な役割を果たしてはないのである。

他にも違いとして二つのことが指摘できるであろう。その一つは、国生みで最初に出現した存在についてである。『古事記』神話ではヒルコが国生みの最初に生まれているのであるが、『日本書紀』本文神話では、ヒルコはイザナキとイザナミが一番最後に生んだアマテラスなどと共に生まれたと述べている。ヒルコは三歳になるまで立つことができなかったとされ、それゆえ『古事記』神話と同様に、船（『古事記』神話では葦でできた船、『日本書紀』本文神話では楠でできた船という違いはある）に乗せて、海に捨ててしまうのである。

『日本書紀』本文神話において国生みで最初に出現するのは淡路洲、つまり、淡路島である。ただし、「淡路洲を以て胞とす」と記述されているように、¹⁷⁾淡路洲を生まれた子として位置づけているわけではない点に注意しなければならない。つまり、淡路洲をオホヤシマ（『古事記』神話では「大八嶋」、『日本書紀』神話では「大八洲」と漢字表記されている）国の一つとして捉えてはいないのである。なお、この点については『日本書紀』別伝神話に、本文神話

とは異なる伝承が多数伝えられている点が注目される。⁽¹⁸⁾ 淡路洲をオホヤシマ国の一つとして捉えるか否かについては伝承によって相違しており、それらの伝承を踏まえた上で、『日本書紀』編纂者は淡路洲をオホヤシマ国の誕生に先だつて出現したものととして、オホヤシマ国の一つとして捉えてはいないのである。

これに対して、『古事記』神話の場合、淡路島はヒルコに続いて生まれた淡嶋と似ているようであるが、淡嶋は国生みに失敗して生まれたものとして位置づけていて、その後、この淡嶋とは異なるアハヂノホノサワケの嶋が生まれ、それこそが淡路島であるとしている。つまり、淡路島をオホヤシマ国の一つとして捉えているのである。

このように、両神話では、国生みで最初に出現した存在について異なる記述をしており、さらに、淡嶋と淡路島を区別するか、淡路島をオホヤシマ国の一つとして捉えるかどうかについても、捉え方が一致していないのである。

もう一つの違いは、結婚の際に手順を誤ったことと国生みの失敗との関係についてである。『古事記』神話では、結婚の際に手順を誤ったことを、最初の国生みに失敗したことの原因として位置づけており、したがって、手順を改めて、やり直したことで国生みは成功するのであるが、『日本書紀』本文神話では、手順の誤りに気づいて、やり直したにも関わらず、最初の国生みで満足のゆく結果にはなっておらず、結婚の際に手順を誤ったことと国生みの失敗との関係が不明瞭になっている。その結果、最初に生まれた淡路洲は満足のゆくものではなかったのに、次以降に生まれたものが満足のゆくものになっている理由については示されないままになっているのである。

(い) 国生みの具体的な様相

その後、国生みはオホヤシマ国とその他の嶋々の誕生という形で展開することになるが、この点に関しても、『古事記』神話と『日本書紀』本文神話では様々な違いを見せている。まずは誕生するものをすべて示すことにしよう。

『古事記』神話

- | | | | | | |
|---------------|------------|----------|-------|-------|----------|
| ① アハヂノホノサワケの嶋 | ② 伊予之二名嶋 | ③ 隠伎之三子嶋 | ④ 筑紫嶋 | ⑤ 伊伎嶋 | ⑥ 津嶋 |
| ⑦ 佐度嶋 | ⑧ 大倭豊秋津嶋 | ⑨ 吉備児嶋 | ⑩ 小豆嶋 | ⑪ 大嶋 | ⑫ 女〈ひめ〉嶋 |
| ⑬ 知訶嶋 | ⑭ 両児〈ふたご〉嶋 | | | | |

『日本書紀』本文神話

- | | | | | | |
|------------------|---------|------------|-------|------------|------|
| ① 大日本〈おほやまと〉豊秋津洲 | ② 伊予二名洲 | ③ 筑紫洲 | ④ 億岐洲 | ⑤ 佐度洲 | ⑥ 越洲 |
| ⑦ 大洲 | ⑧ 吉備子洲 | ⑨ 対馬嶋〈つしま〉 | ⑩ 壹岐嶋 | ⑪ 処処の小〈お〉嶋 | |

両神話とも、日本に相当する陸地の主な部分を総称して「オホヤシマ国」と呼んでおり、各々で①～⑧で示したものがその中に含まれているシマ（「嶋」または「洲」）である。一見して明らかのように、一致しないものがある。それに対し、『古事記』神話で示された①⑤⑥の嶋が『日本書紀』本文神話ではオホヤシマ国に含まれていない。それに対して、『日本書紀』本文神話では、⑥⑦⑧の洲がオホヤシマ国に入れている。そのうちの⑦大洲と⑧吉備子洲は『古事記』神話ではオホヤシマ国に含まれていない、その他の嶋々として登場している。また、『日本書紀』本文神話に

登場する越洲は、一部の別伝神話にも登場するが（第四段の第一および第八の一書）、『古事記』神話では登場していない。越は現在の北陸地方を指すものと思われるが、本州と陸続きである北陸地方がなぜ洲として捉えられているのかについては議論のあるところである。¹⁹ また、『古事記』神話では越は嶋として独立しておらず、おそらく大倭豊秋津嶋の中が含まれていると捉えられているのに対して、『日本書紀』本文では、大日本豊秋津洲とは区別されて越洲が挙げられているので、『古事記』神話が挙げる「大倭豊秋津嶋」と『日本書紀』本文神話が挙げる「大日本豊秋津洲」は、厳密には一致していないことになるであろう。

さらに、オホヤシマ国で共通して誕生しているものについても、誕生する順番がほとんど一致していない。順番に関して特に顕著な違いとして指摘できるのは、オホヤシマ国の中心となすと思われる大倭豊秋津嶋（大日本豊秋津洲）である。『古事記』神話ではオホヤシマ国の最後として誕生するのに対して、『日本書紀』本文神話では一番最初に誕生しているのである。なお、『日本書紀』別伝神話の中で大日本豊秋津洲の誕生に言及している伝承は全部で五つ（第四段の第一・第六・第七・第八・第九の一書）ある。そのすべてにおいて大日本豊秋津洲が最初に誕生したか、淡路洲に続いて誕生したと記しており、最後に誕生したと記しているものは皆無である。『日本書紀』編纂者が別伝神話に見られるこれらの記述全部に手を加えて、大日本豊秋津洲誕生の順番をわざわざ最初の方に入れ替えたとは考えにくいので、誕生の順番が最初の方であったというのが諸伝承における実状であったのであろう。もしそのような推測が妥当であるならば、順番の入れ替えは、むしろ『古事記』神話を編纂する過程で行われたという可能性が想定でき

るであろう。その誕生に関して、最初か最後かということがどのようなニュアンスの違いを生み出すのか厳密には分からないが、そのことがひいては、大和の一地域から本州のかなり部分まで指し示しうる大倭豊秋津嶋（大日本豊秋津洲）という地域に対する認識の違いにまでつながってゆくかもしれないのである。⁽²⁰⁾

続いて、オホヤシマ国以外についても検討してみたい。『古事記』神話では、オホヤシマ国以外にも合計五つの嶋が示されるが、それらの嶋もすべて「生む」と言い表し、「嶋」という表記を付している。これに対して、『日本書紀』本文神話では、オホヤシマ国以外には対馬嶋、壹岐嶋という二つの嶋が示されているが、それ以外は「処処の小嶋」という形で省略されているため、実際に現れたものの総数ははっきりしない。これらについては「生む」と言い表しておらず、また、「洲」という表記も付していない。つまり、「潮の沫の凝りて成れるもの」と言い表し、「嶋」という表記を付しているのである。その点から、『日本書紀』本文神話では、オホヤシマ国とそれ以外の嶋に明確な違いを見出していたと考えることができるのである。

ただし、『古事記』神話でも、オホヤシマ国を生んだ後、「還ります時」という記述があり、これは単に戻るという意味とは考えにくい。なぜなら、イザナキとイザナミの国生みは、淡路嶋↓四国↓隠岐嶋↓九州各地↓佐渡嶋↓本州という順序で進められており、西から東に行って、また、西に帰っていったというようには単純な方向性では捉えられないからである。この「還ります時」とは、国生みの仕事をしに行き、それを終えて、戻ろうとしていた時と解釈すべきものと思われる。つまり、それ以外の嶋は、国生みを終えて、戻る途中に、いわば、ついでに生まれたと考え

られるのである。そのような解釈に基づくならば、『古事記』神話においても、オホヤシマ国とそれ以外の嶋にそれ相応の違いを見出すことは可能となるかもしれない。

(う) 国生みにおける亦の名の併記

その他にも、この国生みに関しては、両神話において大きな違いが見出される。すなわち、『古事記』神話では、生まれたほとんどの嶋に「亦の名」という形で名を併記している点である。それはつぎのようなものである。

- ③ 隠伎之三子嶋 ↓ アマノオシコロワケ ⑤ 伊伎嶋 ↓ アマノヒトツバシラ
- ⑥ 津嶋 ↓ アマノサデヨリヒメ ⑧ 大倭豊秋津嶋 ↓ アマツミソラトヨアキヅネワケ
- ⑨ 吉備児嶋 ↓ タケヒカタワケ ⑩ 小豆嶋 ↓ オホノデヒメ
- ⑪ 大嶋 ↓ オホタマルワケ ⑫ 女嶋 ↓ アマノヒトツネ ⑬ 知訶嶋 ↓ アマノオシヲ
- ⑭ 両児嶋 ↓ アマノフタヤ

さらに、「亦の名」という形でないが、嶋全体を「身」と捉え、その身に「面（おも）」があるとして、次のような名が示されている。

② 伊予之二名嶋

伊予国 ↓ エヒメ 讃岐国 ↓ イヒヨリヒコ 粟国 ↓ オホゲツヒメ

土左国 ↓ タケヨリワケ

④ 筑紫嶋

筑紫国 ↓ シラヒワケ 豊国 ↓ トヨヒワケ 肥国 ↓ タケヒムカヒトヨクジヒネワケ

熊曾国 ↓ タケヒワケ

したがって、①～⑭の嶋のなかで①のアハヂノホノサワケの嶋と⑦佐渡嶋以外はすべて嶋の名とは別に亦の名を持つことになる。なお、このアハヂノホノサワケの嶋については、そもそもこの名自体が、「ワケ」という、明らかに男性を表す言葉を含んでおり、他の嶋における亦の名、たとえば、アマノオシコロワケやアマツミソラトヨアキヅネワケなどと似たような形になっており、したがって、あえて亦の名が付け加えられなかったという可能性も考えられるように思われる。⁽²²⁾

これに対して、『日本書紀』神話では、本文神話は言うまでもなく、別伝神話のどの伝承においても、このような亦の名が併記されることはないのである。したがって、この亦の名の有無は両神話における大きな違いとして指摘することができるであろう。

それでは、なぜ『古事記』神話においてほとんどの嶋に亦の名が併記されているのであろうか。それについて考える際に、まずそのような亦の名がそもそも元々の神話伝承の中に実際にあったのかどうかということも問う必要があるであろう。もっとも、『古事記』神話を編纂する際に用いられた神話伝承を、編纂以前に遡ってそのまま見るこ

ができない以上、それを確定する明確な根拠は存在しないのであるが、『日本書紀』別伝神話にある国生みに関する複数の伝承——すなわち、第四段の第一・第六・第七・第八・第九の一書という五つの伝承——に、このような亦の名が一切示されていない点を考慮するならば、亦の名は『古事記』神話を編纂する際に用いた神話伝承に元々存在していたものではなく、『古事記』編纂者が何らか意図に基づいて新たに付け加えた名であると推測することができるのではないだろうか。『日本書紀』に出ている神話伝承にはまったく見出されない記述が『古事記』神話に登場しているという事例もかなりあるので、そう断言することはできないが、そのような推測は十分に可能であると思われる。つぎに、『古事記』神話において亦の名が併記されていることの意味について考えてみたい。この亦の名という形で示されている名のほとんどが——具体的に言うところ、十八個の名のうちの十五個までが——、男性を表す「ワケ（別）」「ヲ（男）」「ヒコ（比古）」や、女性を表す「ヒメ（比売）」という言葉を含んでいる。これは単なる偶然ではなくて、明らかに性別の違いを示そうとしたものと言えるであろう。前述したように、イザナキとイザナミは完成した一対の男女神として、生成を具体的に言う神として位置づけられていた。したがって、イザナキとイザナミが神である以上、生まれる子も当然、神であるということになるし、イザナキとイザナミに性別がある以上、生まれる子にも当然、性別があるということになるのである。要するに、亦の名を併記しているということは、国生みで生まれた嶋を、単なる国土としてのみ捉えるのではなく、同時に、性別をもった神として捉えようとしていると考えられるのである。なお、国土を神として捉えようとすることに關しては、併せて考慮すべき点が三つある。

その第一は、粟国の亦の名として示されているオホゲツヒメが、後にイザナキとイザナミの間に生まれた食料神であるオホゲツヒメと名前が一致している点である。両者は共にイザナキとイザナミの子として位置づけられているとは言え、異なる場面で生まれているので、当然、違う存在であると考えざるをえないが、違う存在であるとしても、なぜ同一の名前を持つに至ったのかということが問題になるであろう。

粟国は四国の一部であるが、鳴門海峡をはさんで淡路島と接するこの地は大和にあつた都に住む人々から見て、心理的に近い距離にあつた。しかも、「粟国」という名前が表しているように、この地は温暖で粟が豊富に育つ場所であつたのであろう。つまり、粟国は都に食料を供給する重要な拠点として見なされていたのではないかと推測されるのである。そのような推測に基づくならば、粟国の亦の名と食料神がオホゲツヒメという同じ名前であることの理由として、食料と結びつけてイメージされる粟の国の亦の名に、食料神として知られるオホゲツヒメの名が当てられたか、あるいは、粟国の亦の名として知られているオホゲツヒメが、食料神という独立した神として捉えられたか、という二つの可能性を想定することができるであろう。

その第二は国魂という観念についてである。国魂とは国土そのものに神霊を見出そうとしたものであるが、その神霊は国土のどこかに局地的に存在するというわけでもないで、結局のところ、そのような発想は、国土そのものが神なのであるという考えに行き着くことになるのである。

『古事記』および『日本書紀』の記述でこの国魂に関係すると思われるものとして、以下の神を挙げることができ

るであろう。

オホクニミタマ…『古事記』神話に登場する神。スサノヲの孫、オホトシの子として位置づけられている。

オホクニタマ…『日本書紀』別伝神話（第八段の第六の一書）に登場する神。オホクニヌシの亦の名として挙げられている。

ヤマトノオホクニタマ…『日本書紀』崇神天皇六年の条に登場する神。

この三例は必ずしも同じ神を指しているというわけではないが、いずれの神も、その名前からして、国土そのものと同一視されるような神霊であると考えられる。なお、本居宣長は、国魂（あるいは、国御魂）を「其の国を経営（つくり）坐し功德（いさを）ある神」であると捉えている。²⁴⁾ 国土の開拓は、人間側からの働きかけだけでは不十分であり、その国土そのものである国魂という神の力によって成し遂げられるということである。²⁵⁾

その第三は、シラヒワケの位置づけに関わるものである。前述のように、このシラヒワケは、『古事記』神話で筑紫嶋の一つの面として位置づけられる筑紫国の亦の名であるが、神話を離れた実際の宗教史上では、筑紫国の国魂として、現在もある筑紫神社（福岡県筑紫野市）に祭られている。つまり、筑紫国自体が神として祭られているのである。同様の例として、壹伎嶋の国魂としてのアマノヒトツバシラを祭っている箱崎八幡神社（長崎県壱岐市）という神社を挙げることができるであろう。

以上のように、国土を神として捉えようとすることに關して、考慮すべき三つの点について検討してみた。それら

『古事記』神話と『日本書紀』神話の比較研究（岸根）

に基づいて指摘するならば、国土が神として位置づけられることは、日本の神話、あるいは、実際の日本宗教史上において、決して特異なものではないことである。日本の神話のみならず、日本の宗教における神のとらえ方は非常に幅のあるものであり、端的に言うならば、人間にとつて特別と思われるようなものであれば、たとえそれがなんであったとしても、神として位置づけることが可能なのである。²⁶⁾『古事記』神話において、イザナキとイザナミによつて生み出された国が、亦の名という形で性別のある神としての名を併せ持つていることにも、そのような捉え方が背景にあったと考えることができるであろう。ただし、これは『日本書紀』本文神話のみならず、別伝神話にも見出されない、『古事記』神話独特の記述であるということには注意しておかなければならない。

むすびに

以上のように、日本神話に見出される別天つ神、神世七代、および、国生みという三つの記述に関して、『古事記』神話と『日本書紀』本文神話を比較して、その異同について考察を加えてきた。この部分に限ってみても、天という天上界の位置づけ、初期の登場する神の特色、登場する神の数や名前、生み出される国の具体的な内容とその位置づけ方など、実に多くの違いを見出すことができる。『古事記』神話と『日本書紀』本文神話は、同じような神話伝承に基づきながらも、結果的には、それぞれで大きく異なる神話の体系化を図っていたと言ふべきであろう。

「はじめに」でも少し述べたように、両神話の記述を安易に同一視するような理解の仕方は、『古事記』神話と『日

本書紀』本文神話という各々の神話に対する理解を誤った方向に導くことになるであろうし、ひいては、日本神話の持っている多様性を画一的なものへと損減させてしまう危険性へとつながってゆくであろう。それゆえに、両神話を比較して、その異同について、慎重に検討してゆかなければならないと考えるのである。

筆者が取り組もうとしている『古事記』神話と『日本書紀』神話の比較研究はまだ緒にいたばかりであるが、引き続き、国生みに続いて展開される様々な記述について、両神話の比較研究を続けてゆきたいと思う。

注

(1) 本文神話と別伝神話が分量的にどのような比率になっているのかを試みに示しておきたい。筆者が所持している『日本書紀』神話の電子データファイルから、句読点、割注などを取り除き、漢字だけからなるテキストに加工して調べてみると、漢字の総数は二万二百四字であり、そのうちで本文神話に属するものが四千六百九十八字、別伝神話に属するものが一万五千五百六十六字である（なお、JISコード上の問題で表記できない漢字は下駄記号で置き換えた）。したがって、純粋に漢字の数だけで比較するならば、『日本書紀』神話全体の約二十三パーセントが本文神話、残る約七十七パーセントが別伝神話ということになり、別伝神話は本文神話の実に三倍以上の分量になっている。用いられている漢字の総数をどう確定するかという解釈の違いもありうるので、厳密な数

値とは言えないが、これによって本文神話と別伝神話の分量的な比率を大まかに示したことになるであろう。

- (2) 『古事記』の神話と『日本書紀』の神話を中心とする日本神話は、一般に高天の原神話、出雲神話、日向神話の三つに分けられる場合が多い。しかし、イザナキとイザナミの国生みの話を高天の原の神話に入れるのはかなり無理があるし、また、アマテラスを中心とする天つ神がオホクニヌシに葦原の中つ国の譲渡を求める話やホノニギがサルダビコと遭遇し、その先導によって天降りをする話を出雲神話か日向神話のどちらから入れるのも難しいであろう。そのような事情から、筆者は、高天の原神話に先立つものとして、天地の分離からアマテラス、ツクヨミ、スサノヲの登場までを「国生み神話」として別立てし、さらに、出雲神話と日向神話の間に、天降り神話を別立てして、日本神話を五つの部分に分ける方がより適切であると考ええる。

- (3) 「記大」の四十三頁を参照のこと。

- (4) 先行研究において、『古事記』の序文を、後から付け加えられた偽作と捉える考えは多く見出される。たとえば『世界観』（二十頁、三十七頁）、「ひみつ」（百七―百十九頁）を参照のこと。この序が『古事記』に元々付随していた序ではないと断言することは難しいかもしれないが、真作であることを疑わせるような点が多数あるため、この序で述べられていることに基づいて『古事記』神話の特色を論じることが控えるべきであると思う。

- (5) 神話における世界を自然的なものと社会的なものという二つの次元に分けて捉える発想については、「世界観」の五十六―六十頁、および、「記紀」の二十五―二十七頁を参照のこと。

(6) 「紀大上」の百三頁と六四二頁を参照のこと。

(7) 「記大」「記思」「記集」「記全」など、ほとんどの『古事記』刊行本では、この「隱身」という表現を「身を隠す」と読んでいるが、「身を隠す」だと、元々目に見える形で存在する身を隠したという意味になって、具体的に表象しえない「独り神」という存在のあり方とは相違するようになる。筆者は「記国」などの記述に従って、これを「隱り身」——すなわち、表象しえない姿——と読むことにしたい。

(8) この「独り神」を、男または女のどちらか一方の神として捉える可能性もあるが、その場合には、『日本書紀』本文神話に出てくる「純男」のように、どちらか一方の性を示せばよいわけで、わざわざ「独り」と言う必要はないであろう。「独り」とは、男と女という二つの性が成り立っておらず、そのどちらとも言えない状態のことを指していると考えられる。

(9) 本稿では、漢字の読み方を〈 〉の記号を付して表記することにする。

(10) 「紀大上」の七十六頁を参照のこと。

(11) 「記集」の三百二十五頁を参照のこと。

(12) 岸根敏幸「日本神話におけるアメノミナカヌシ(二)」(平成二十一年、『福岡大学人文論叢』第四十一巻・第二号)の九百六―九百二十四頁を参照のこと。

(13) 「達成」の百二―百六頁を参照のこと。

(14) この神の漢字表記である「豊雲野」は「トヨクモノ」と読まれ、「クモ」は雲、「ノ」は原野と理解されることが多いが、本稿では『古事記伝』の説に従って、「トヨクモヌ」と読み、「クモ」が、兆すことを表す動詞「くむ」の派生語、「ヌ」は沼であると解釈する。「記伝一」の二百頁を参照のこと。

(15) 具体的な例を挙げるならば、「記伝一」の二百九十五頁では、坂のある場所を表す「シナカ」が「サカ」と変化し、さらに、それが「サ」となったと理解し、また、「ヅ」を連体助詞の「ツ」が濁ったものの、「チ」を神の尊称と理解する。したがって、サヅチを坂の神として捉えている。これに対して、「注釈一」の百九十四～百九十五頁では、「サ」を接頭語と推測し、文字通り土の神として捉えている。「記集」の三百三十八頁では、「サ」を「早<さ>」と解釈し、サヅチを初めて生じた土地としている。本稿では「注釈一」の説をとることにする。

(16) たとえば、『古事記』神話において、タカミムスヒがアマテラスと並んで登場している点について、「達成」の八十～八十一頁では、タカミムスヒがアマテラスに止揚されることによって、ムスヒのもつエネルギーがアマテラスを貫いてゆくと理解しており、「記紀」の百三十三～百四十一頁では、アマテラスはタカミムスヒを止揚しえない存在であるからこそ、タカミムスヒはタカギという神として公然と姿を表すのであると理解している。両者は理解はまったく正反対ではあるが、いずれにおいても、隠身が顕在化しうる存在であるということは認められている。

(17) この場合の「胞」とは胞衣（えな）のことと思われる。通常は、出産直後に出てくるため、「後産」と呼ばれ

ているのであるが、それが子に先だつて出てきたというのであるから、異常な出産であつたことが示されていると考えられる。

(18) 『日本書紀』別伝神話において淡路洲をオホヤシマ国に含ませるかどうかは各伝承によつて相違している。すなわち、第四段の第一の一書では、『古事記』神話と同様に、淡嶋と淡路洲が区別されており、淡路洲はオホヤシマ国に含まれている。第四段の第六の一書では、「淡路洲・淡洲を以て胞（え）として」と述べており、淡洲と淡路洲が並列されて区別されているが、いずれもオホヤシマ国に含まれていない。第四段の第七と第八の一書では、淡路洲を生むとのみあつて、淡洲は登場しておらず、淡路洲はオホヤシマ国に含まれている。第四段の第九の一書では、淡路洲を胞とし、その後、淡洲が生まれる。つまり、淡路洲はオホヤシマ国に含まれないが、淡洲はオホヤシマ国に含まれているのである。

(19) 「紀大上」の八十四頁の注一を参照のこと。

(20) 『古事記』神話のように、大倭豊秋津嶋が最後に登場する場合、編纂者の認識していた日本国土のうちで、それ以前に登場した嶋以外の残り全体を指し示すことになるように思われるし、『日本書紀』本文神話のように、大日本豊秋津洲が最初に登場する場合、編纂者の認識していた日本国土のうちで、最も中心的な場所である大和地域を指し示すことになるように思われる。もちろん、これはあくまでもニュアンス上の違いであつて、必ずそのように理解されるというわけではない。

(21) 「紀大上」の八十二頁を参照のこと。

(22) 「ワケ(別)」は古代に用いられた姓の一つであつて、大和を本拠地とする天皇家から分かれて、地方に領地を得て定着した者とその一族に与えられた。また、皇族で後に天皇になった皇子の名にもこのワケが付されている場合がある(たとえば、景行天皇はオホタラシヒコオシロワケ、応神天皇はホムダワケなど)。領地を得て地方に定着したのは皇子のみであり、その子孫で、地方の首長的地位を受け継いだのも基本的に男性であつたと考えられるので、このワケは男性を表すものと考えてよいであらう。

(23) 大胆に推測するならば、元々、アハヂノホノサワケは淡嶋の亦の名であつたが、淡嶋とは別に淡路嶋をオホヤシマ国に組み入れるという状況に伴つて、両名が分離して、神名ではない、アハヂノホノサワケの嶋という表現が誕生したということも考えられるのではないか。

(24) 「記伝三」の六十頁を参照のこと。

(25) 現在も行われている地鎮祭に同様の発想が見出されると思われる。すなわち、ある土地に建物を建てる場合に、建てる側がどんなに努力しようとも、それだけでは不十分なのであつて、その土地の神をきちんと祭り、その協力を得ないことには、建物は大地にしっかりと根づかないのである。

(26) 本居宣長は迦微(かみ)について次のように述べている。「古御典等(いにしへのみふみども)に見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸本草のたぐひ海山な

ど、其余何にまれ、尋常〈よのつね〉ならずすぐれたる徳〈こと〉のありて、可畏〈かしこき〉きも物を迦微とは云なり。」「〔記伝一〕の百七十二〜百七十三頁を参照のこと。

引用文献

〔記大〕 倉野憲司、武田祐吉校注『古事記 祝詞』（昭和五十六年、第二十五刷、日本古典文学大系、岩波書店）

〔記思〕 青木和夫、石母田正、小林芳規、佐伯有清校注『古事記』（昭和五十七年、日本思想体系、岩波書店）

〔記国〕 黒坂勝美編『新訂増補国史大系七 古事記 先代旧事本紀 神道五部書』（平成十四年、新装版第二刷、吉川弘文館）

〔記集〕 西宮一民校注『古事記』（平成十七年、第十九刷、新潮日本古典集成、新潮社）

〔記全〕 山口佳紀、神野志隆光校注・訳『古事記』（平成十六年、第六刷、日本古典文学全集、小学館）

〔紀大上〕 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注『日本書紀 上』（昭和四十四年、第三刷、日本古典文学大系、岩波書店）

〔紀国前〕 黒坂勝美編『新訂増補 国史大系 日本書紀 前篇』（昭和五十八年、吉川弘文館）

〔紀全一〕 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳『日本書紀 1』（平成十八年、第四刷、日本古典文学全集、小学館）

『古事記』神話と『日本書紀』神話の比較研究（岸根）

〔記伝二〕 本居宣長著『古事記伝（一）』（平成八年、第四刷、岩波文庫）

〔記伝三〕 本居宣長著『古事記伝（三）』（平成八年、第二刷、岩波文庫）

〔注釈一〕 西郷信綱著『古事記注釈 第一卷』（平成十八年、第二刷、ちくま学芸文庫）

〔達成〕 神野志隆光著『古事記の達成』（平成十九年、第二刷、東京大学出版会）

〔世界観〕 神野志隆光著『古事記の世界観』（昭和六一年、吉川弘文館）

〔記紀〕 水林彪著『記紀神話と王権の祭り』（平成十三年、改訂版、岩波書店）

〔ひみつ〕 三浦佑之著『古事記のひみつ 歴史書の成立』（平成十九年、第二刷、吉川弘文館）